

当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。

Copyrighted materials of the authors.

「『プレゼンス・アフリケーヌ』研究 新たな政治=文化学のために」
(平成 27 年度第 3 回研究会)

日時：2016 年 3 月 5 日（土）14:00-18:30

場所：AA 研セミナー室（301）

松井裕史（金城学院大学）

「隆起する大地の夢想—セゼールの詩学と政治」

コメンテーター：平田周（東京大学／日本学術振興会特別研究員 PD）

中村隆之（AA 研共同研究員，大東文化大学）

「エドゥアール・グリッサンと『アコマ』」

コメンテーター：西成彦（立命館大学）

全員討論

概要

第 3 回研究会を上記の日時に開催した。以下、概要を報告する（敬称略）。

はじめに、中村隆之の司会のもと、松井裕史による報告「隆起する大地の夢想—セゼールの詩学と政治」が行われた。報告者から事前に提出された要旨は以下の通りである（松井執筆）。

プラトンの『国家』において、国家から詩人が追放され、政治と詩は相容れないものとされるが、はたしてそうなのだろうか。詩人であり政治家でもあるマルチニック出身のエメ・セゼールの作品には、個としての人称「私」が、生まれつつある共同体「われわれ」を代弁する、政治と詩、集団と個の並存が見られる。バシュラールは『空と夢』で、「自由である」という感覚が、軽やかに幸せな飛翔の心象になると言うが、セゼールの作品においては、大地が上に向かう重く痛々しい心象で「自由になる」という意思が表明される。前者は個の自由を前提としているのに対し、後者は集団の自由・解放が念頭にあるためである。同時に、天と地が分離される大陸の詩学とは異なり、海から地が突出してできた島嶼の原風景もある。この発表では、『帰郷ノート』『クリストフ王の悲劇』『テンペスト』などから、垂直に隆起する大地の例を挙げて、バシュラールの個を前提とした叙情の詩学と、セゼールの集団を代弁する個の詩学について紹介する。

当日の報告は以上の要旨におおむね沿うかたちで行われたが、とくに付言すべき点としては、本報告が、昨年 6 月の本研究会でなされた中村隆之の報告「詩の国民性（民族性）とは何か？ 脱植民地化期のフランス語圏カリブ・アフリカ知識人における文学の問いをめぐって」の内容

を受けたものであり、それだけに冒頭では、“nation (国民=民族)”の問題について踏み込んだ言及がなされたことがある。一方、後半部に設定された主題——セゼール詩学における山の上の建造物という問題——については、時間の都合上、駆け足の紹介となった。

報告を受けてコメンテーターの平田周は、フランス思想史の立場から概容を整理したうえで、「詩と政治」という際の「政治」とは、他ならぬセゼールにとり何であったかという点をあらためて問題にした。他の参加者からは、報告で取り上げられた詩集『失われた身体 *Corps perdu*』の“Je or vent paix-là”をどう解釈するかという問題、バシュラールの詩学との対比に基づいてセゼールの詩学を読解することの当否、宗主国フランスと植民地の“nation”をめぐる連続と断絶という問題などについてコメントがあり、これらの諸点をめぐって活発な議論が交わされた。

つぎに、佐久間寛の司会のもと、中村隆之が「エドゥアール・グリッサンと『アコマ』」という主題で報告をおこなった。これは、中村が『立命館言語文化研究』27 巻2・3 合併号の特集「環カリブ地域における言語横断的な文化／文学の研究」に寄稿した同名の論文の続編にあたり、ほぼ完成された草稿にもとづき、いくつかの主題をピックアップするかたちで以下のような報告が行われた。

『アコマ』は『プレザンス・アフリケーヌ』誌とも関わりが深いマルティニック生まれのフランス語作家エドゥアール・グリッサンが刊行した全5号の雑誌である。第1号をとりあげた前掲論文にたいし、本報告では第2号、第3号が主題となる。はじめに目次と構成が概観され、つぎに同誌における「アメリカス」や合衆国の黒人解放運動への高い関心が取り上げられた上で、最後にシュヴェロールによるマルティニックの民話についてのユニークな分析が丹念に紹介された。グリッサンの演劇理論と実践をめぐる考察は、時間の都合上、割愛された。

報告を受けて、まず『立命館言語文化研究』の上記特集の編者である西成彦からコメントがあり、ネグリチュードとは異なるアメリカスという主題の面白さ、ラフカディオ・ハーンの採集した民話が『アコマ』に再掲されたことの含意——セゼールの『トロピック』誌でもハーンの民話が再掲されている——、シュヴェロールがカリブ海域世界の民話の特徴として着目した「飢え」というトピックの超域的な重要性などが指摘された。これを受けつつ他の参加者からも、1943-44年頃のカリブ海域世界における語圏を越えた汎アメリカ主義への関心の高まり、学術研究と教育を同時に遂行しようとした『アコマ』の試みの現代的意義、民衆文化が「形骸化」したと評する際のグリッサンの問題性といった多様な論点が提出され、議論は1時間以上に及んだ。

研究会は19:00頃終了した。今回は共同研究員を含め20名の参加があった。

(文責：佐久間)